

大学との連携で行う 名古屋大学教育学部附属 中・高等学校の 高大接続型学力形成

名古屋大学教育学部非常勤講師
前名古屋大学教育学部附属高等学校 副校長

山田 孝

今、求められている「学力」とは？

- ・大学入学共通テスト導入に向けた試行調査(プレテスト)の問題から

独立行政法人 大学入試センター のWebページより

＜問題のねらい等について＞

○ 知識の理解の質を問う問題や思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題を、各科目に おけるすべての分野で重視。(以下略)

- ・中学校学習指導要領(平成29年3月告示 文部科学省)

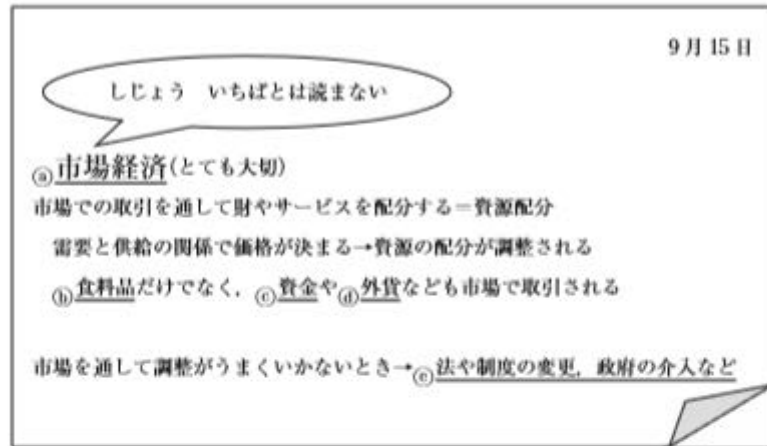
第1章 総則より

- 3 2の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動(以下「各教科等」という

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

大学入学共通テストプレテスト問題 現代社会

第3問 次の生徒Aのノートを見て、下の問い(問1～5)に答えよ。



問1 下線部⑨に関連して、次の生徒A・Bの会話文を読み、他の条件に変化がないと仮定したとき、市場における需要と供給の関係からみて考えられる X に入る発言として適当でないものを、次のページの①～④のうちから一つ選べ。 10

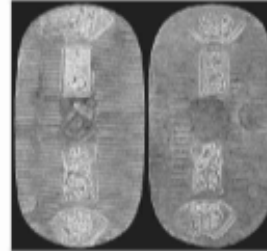
生徒A：私たちはアイスクリームをお店で買うけれど、これは市場を利用していることになるよね。

生徒B：なるよ。多くの人が日常的に使う物を市場で買うようになり、生産者も市場で売るために生産するようになった社会を「市場経済」というんだよ。

生徒A：市場経済って、いつごろできたんだい？

生徒B：市場は世界中に大昔からあったようだけど、日本で市場経済が本格的に発展し始めたのは、江戸時代になってかららしい。日本史の先生が、市場経済の発展に対応できなかった幕府はたびたび財政難に陥ったと話されていたな。

【資料】



慶長小判(左/1600年)と元禄小判(右/1695年)。どちらも額面は1両だが、後者に含まれる金の量は、前者より約5グラム(約30%)少なくなった。

(東京国立博物館所蔵)

生徒A：ああ、思い出した。幕府は何度も改革を試みたらしいね。【資料】にあるように、貨幣を改鋳して小判の質を落としたりもしたとか……。

生徒B：でも、先生は、改革がうまくいかないこともあったと話されていたな。 X。結局、物価が上昇してしまったらしい。

生徒A：それで、経済の面で人々を苦しめることになってしまったんだね。

- ① 商人たちは、売上額は以前と同じでも貨幣の質が落ちれば手に入る金・銀の量が減るので、販売価格を引き上げた
- ② 貨幣の質の問題のほかに、人々が市場で物を買う機会が増えたのに、それらの物の供給を増やせる生産体制がまだなかった
- ③ 質が悪い貨幣は市中で信用されなくなってしまい、商人たちは商品を、より多くの貨幣に対してしか売らなくなった
- ④ 貨幣の質が落ちると、人々は同じ額面でより多くの物が買えるようになるから、商人たちは大売出しをした

教育

edu@asahi.com

金曜～月曜掲載

スウェーデンを舞台にしたアニメーション



「ニルスのふしぎな旅」



「ムーミン」



「小さなパイキング・ピッケ」

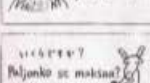
スウェーデン語



「Vad heter det?」



「Hva heter det?」



「Polenka se maksaa?」

北欧の国を問う問題

設問は、スウェーデンが舞台という「ニルスのふしぎな旅」の画像とスウェーデン語のセリフに続き、「ムーミン」と「小さなパイキング・ピッケ」の画像とノルウェー語、フィンランド語のセリフを示し、「フィンランドに関するアニメと言語の正しい組み合わせ」を選ぶ。正答は「ムーミン」・「B」だが、同アニメを手がけた瑞鷹（東京都）によると、「舞台は不明」。センターは根拠として「ムーミンの舞台はフィンランド」という原作者のコメントが載った書籍を挙げたが、ピッケは確認出来ないという。

翻訳家の森下圭子さんはムーミンにひかれ、1994年にフィンランドに移住した。「日本では『北欧』と一緒にされがち。各国の差異や特徴を考える

ムーミンの設問 良問? 根拠弱い?

大学入試センター試験 議論続く

判断力を問う出題

今年の大学入試センター試験で注目を集めた、アニメ「ムーミン」と「小さなパイキング・ピッケ」の舞台となった北欧の国を問う設問を巡る議論が続いている。センターが「厳密な意味で正確なものではない」と認めながらも、「知識・思考力を問う設問として支障はなかった」と説明する問題をどう評価すべきか。騒動は、問題に登場した北欧の国まで広がっている。

話題の設問は「地理B」で出された。東京の高校生がノルウェー、スウェーデン、フィンランドを旅行し、夏休みの宿題として8カ国を比較したりレポートを作ったという想定。8カ国の気候やエネルギー源、産業などを比較する問題に続き、「文化の共通性と言語の違い」がテーマで、ムーミンとピッケの舞台が「フィンランド」か「ノルウェー」かを選ぶ内容だった。

センターは「与えられた画像や題名、言語等の情報から、フィンランドに関連するものを判断できるかを問う」との立場。アニメのキャラクターを知らなくても、「パイキング」や「語族」に関する知識があれば解けるとしている。しかし、ムーミンの舞台がフィンランドという根拠は少なく、ピッケがノルウェーだと明確に示す出典は「確認できていない」と認める。

横浜市の学習塾「知恵学舎」の矢萩邦彦塾長は前提について「確認が不十分で正確性に欠け、表現を変えるべきだった」と指摘する。もっとも、「現実の社会では不確実なことも多い。この問題では、最適な答えを選ぶ判断力が求められているのではないかと続けた。

2021年からは、思考力や判断力がより重視される「大学入学共通テスト」が始まり、マークシート問題も「複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせ思考・判断させる」方向だ。改革を意識したかどうかは不明だが、結果的に今回の設問は複数の画像や文字情報をもとに、受験生の判断力を問う形になった。矢萩さんは「改革を見据え、同じような問題は増えるだろう」と話す。

フィンランドの如

センター試験を巡る騒動は、ムーミンの原作者トーベ・ヤンソンの母国・フィンランドでも、複数の新聞で紹介された。注目を集めているのは「ムーミン谷がどの国か」よりも、日本での報道ぶり。最大手ヘルシンギン・サノマット紙は「どこにあるかなんてささいなことだと思えるだろうが、学歴社会の日本で大学合格に関わるとなれば、受験生にとっては人生を懸ける一大事だ」と伝えた。

フィンランドとゆかりがある人たちは問題をどう見たか。東海大北歐学科の非常勤講師で、フィンランド出身の奥田ライヤさんは「ムーミン谷がフィンランドにあるなんて考えたことはない。どの国よりも美しく、すばらしい場所だと信じている」と言う。「アニメの舞台」ではなく、「作者の母国」を問えば、より正確な問題になったのではないかと話した。

翻訳家の森下圭子さんはムーミンにひかれ、1994年にフィンランドに移住した。「日本では『北欧』と一緒にされがち。各国の差異や特徴を考える

教育評論家の尾木直樹さんもブログで「良問」と評価した。「教育改革は、暗記じゃなく、思考力・判断力・表現力の要素を取り入れた『答えのない問題』に変化します」と書き、ムーミンの問題は「洞察力」が問われているとした。

ただ、根拠が弱いまま、アニメの舞台を断定したことを疑問視する声も根強い。大阪大学院のスウェーデン語研究室は「前提がなくなれば、解答不能となるのではないかと指摘した。同研究室の古谷大輔准教授

少々長い自己紹介

担当学年 分掌

研究関係の取り組み

1989年 平成元年 高校2年副担任 生徒部 前年度より「学校改革」が続く
※学校の教育目標を決定

☆1995年 平成7年 高校2年担任6 研究部 特設教科「総合人間科」開始 研究開発1期3年
研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発ー
『総合人間科』設置の試み」

1998年 平成10年 高校3年担任9 研究部
☆中学校学習指導要領(「総合的な学習の時間」)平成10年12月告示
平成14年より全面施行

1999年 平成11年 高校2年担任10 研究部 中高一貫ワーキンググループの座長となる
☆高等学校学習指導要領(「総合的な学習の時間」)平成11年3月告示
平成15年4月より学年進行で施行

☆この年、学校訪問が急増 500人近くが訪れる

□2000年 平成12年 高校3年担任11 研究部 併設型中高一貫校となる 研究開発2期6年
研究主題「高大の連携を活かした『青年期のキャリア形成』ー総合的学習の
発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発」

◇2001年 平成13年 高校2年副担任 研究部長 1

2006年 平成18年 高校3年副担任 進路部長 2 SSH研究開発1期目
研究主題「併設型中高6年一貫教育において、発達段階に応じた『サイエンス・リテラシー』を育成する教育課程を中・高・大の協同で研究開発する」

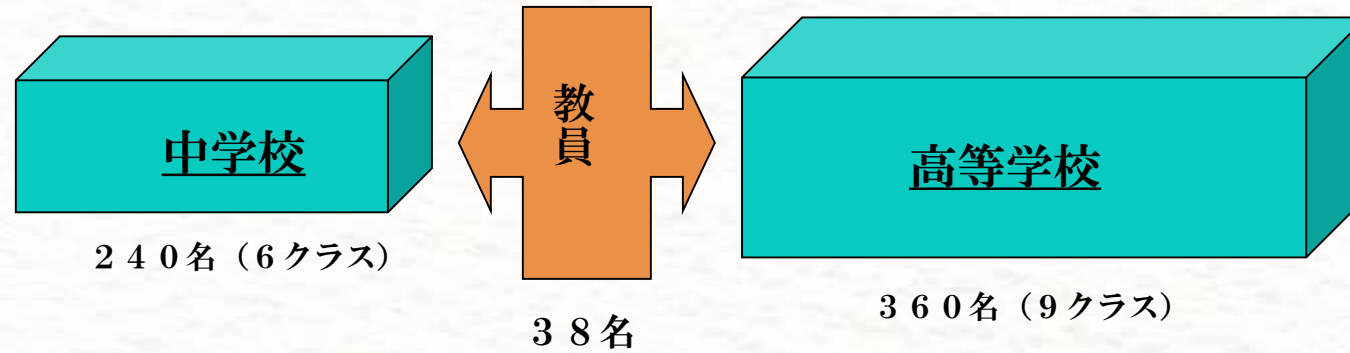
◇2009年 平成21年 学年所属なし 運営委員 中学主幹・教頭
2010年 平成22年 学年所属なし 運営委員 中学副校長

2011年 平成23年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 1 SSH研究開発2期目
研究主題「併設型中高一貫教育において高大接続を考慮した『サイエンス・リテラシー』育成のための教育方法・評価方法を大学と協同で開発する」

2015年 平成27年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 5
スーパーグローバルハイスクール(SGH)
研究主題「トップ型SGUと一体化して『自立した学習者』を育てる探求型カリキュラムの構築」

2016年 平成28年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 6 SSH研究開発3期目
研究主題「『イノベーション・サイエンス』を目指す人材育成 ～中高大接続によるカリキュラム開発と実践～」

名古屋大学教育学部附属中・高等学校の概要



- ・完成教育を重視する中等教育
- ・男女共学 ・非エリート校化
- ・名古屋大学キャンパス内
- ・生徒の自由な学び
- ・個性の伸張
- ・小規模校
- ・教育実習校
- ・研究開発学校

平成12年度より併設型中高一貫校となる



「総合人間科」導入による学びの変化

第一図は、従来の学習方法で、教師が生徒を指導するものである。総合的学習は、

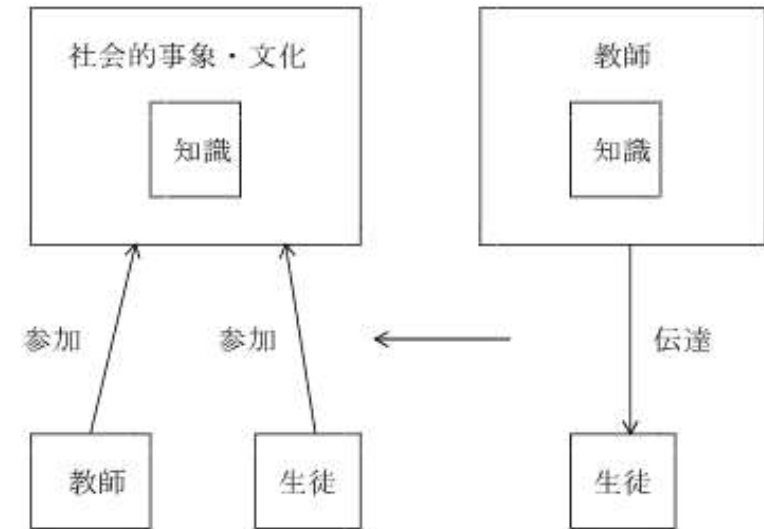
第二図のように、教師と生徒が協力して学びあうことにより成立する。

さらにこの関係から第三図のように生徒が協力し合い、学びあう関係にまで発展させていくのである。

現在では、生徒の学びあいは協同的探究学習に発展している。

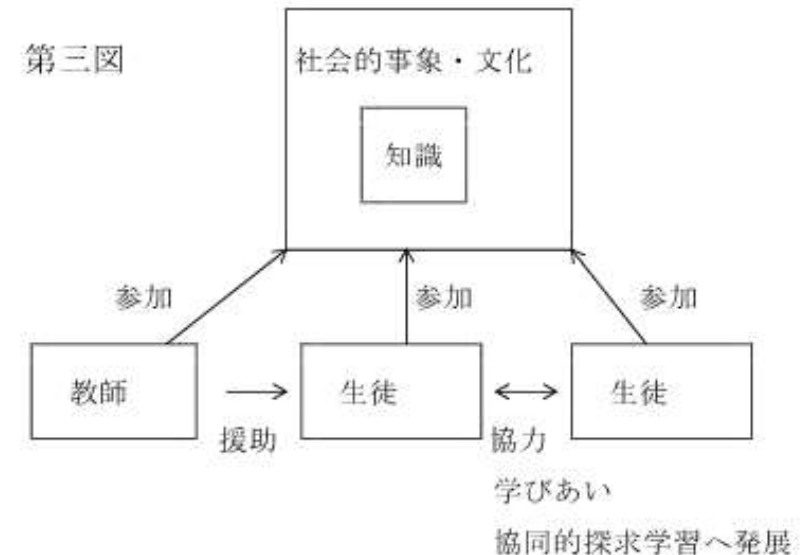
総合人間科の学年テーマ（開始当時）

中学1年「生き方を探るⅠ」
中学2年「生命と環境Ⅰ」
中学3年「国際理解と平和Ⅰ」
高校1年「生命と環境Ⅱ」
高校2年「国際理解と平和Ⅱ」
高校3年「生き方を探るⅡ」



第二図

第一図

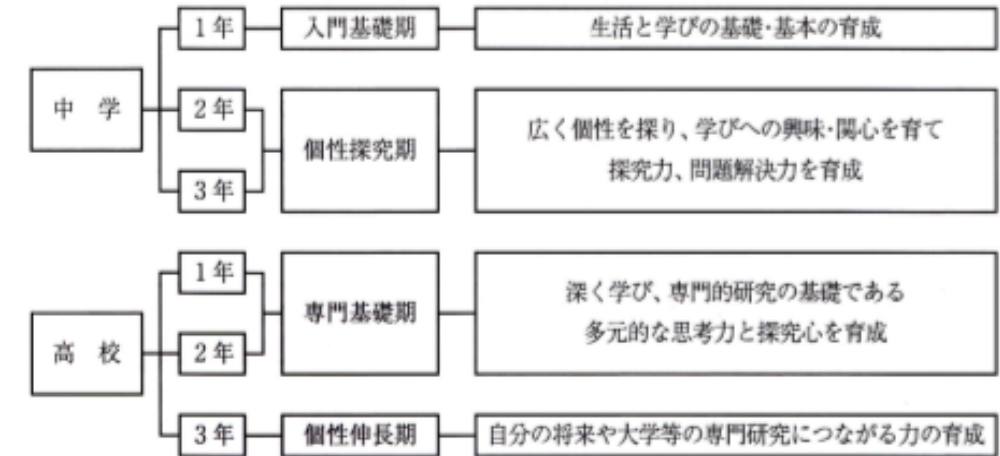


第三図

併設型中学校・高等学校の 基本理念

- (1) 「ゆとり」の活用による6年一貫の「**心の教育**」の内容強化。
- (2) 柔軟で長期にわたる選択的活動を活かした多様な「**個性的自立**」の実現。
- (3) 6年間を通じての「**総合的学習**」を中核とする「**体験的学習**」の充実。
- (4) 寸胴型中等教育学校の閉鎖性を克服する**融合力リキュラム**の展開。特に高等学校から入ってくる生徒達のための特別な配慮としての少人数、個性教育の重視。
- (5) 「より高度な学習環境」たる**大学・学部との研究・教育両面における連携の強化**。

併設型中高一貫教育課程の構造図 1—2—2—1 制



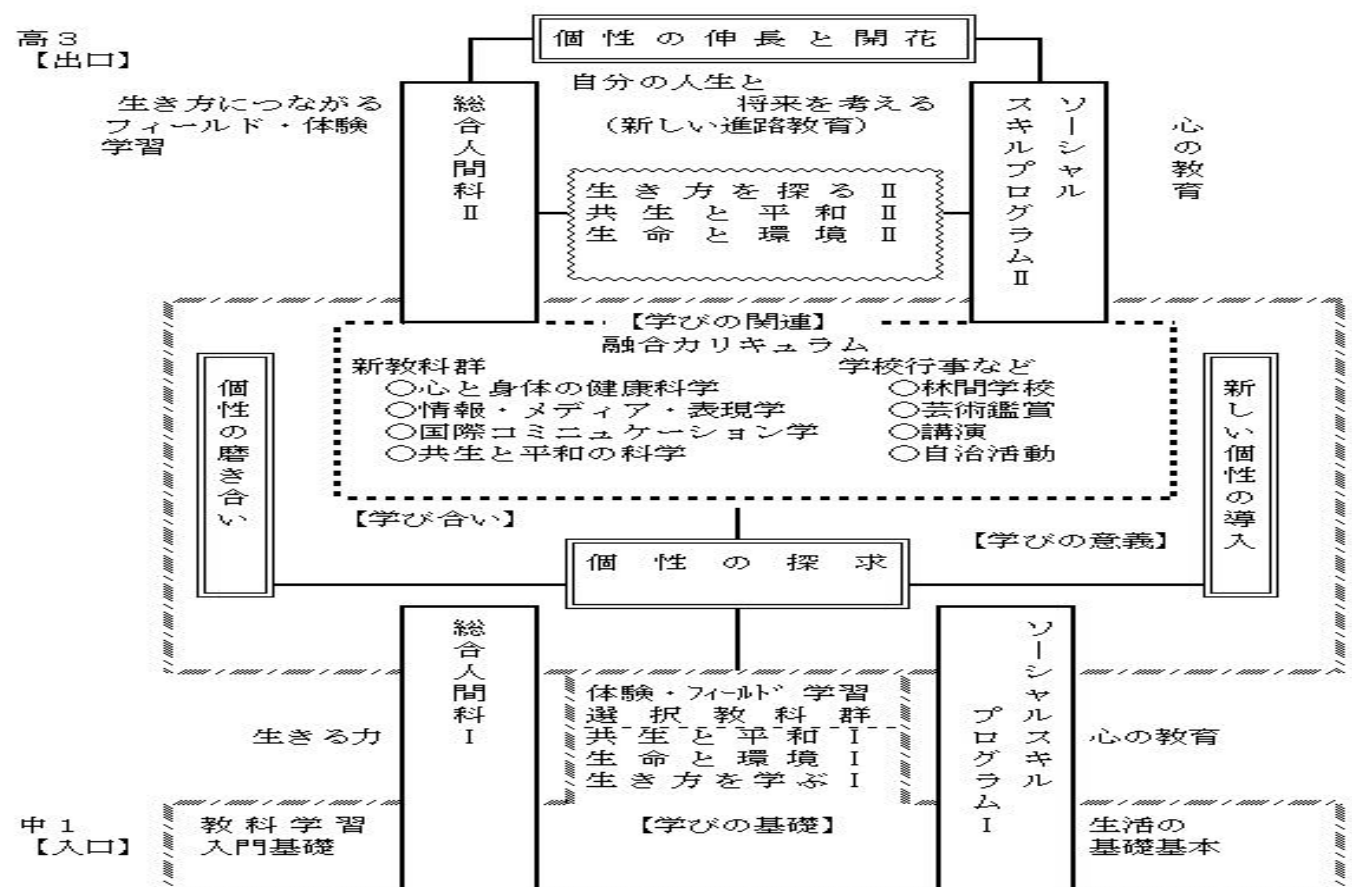
個性探究期（中学2年・3年） 好奇心の扉を開きサイエンスの基礎・基本を豊かに育む SS課題研究Ⅰ
聞いて・見て・触れる古典 木のおもちゃを作ろう 新競技、新スポーツを考案する ものづくりの基本 情報化社会におけるアート 身近な生物の観察 数学を探究しよう！ 音楽をみんなに届けよう！ 藍の絞り染めTシャツを作ろう 映画で英語を

専門基礎期（高校1年・2年） ～論理的思考力・科学倫理・柔軟な思考力を基盤にして、本質を深く理解し、 他者と協同しながら思考の枠組みを柔軟に修正していく力を育む～ SS課題研究Ⅱ
高校1年：前期「科学倫理」 後期「数理探究」 高校2年：STEAM 名古屋大学全学教育科目「基礎セミナー」の受講（高校2年・3年）

(1) 総合人間科・心と身体プログラムと融合カリキュラムの展開

3要素を図式化したものが次に示す構造図である。

個性的自立にむけての併設型教育課程の構造



併設型中高一貫校としての特色

(1) 併設型中高一貫教育における人間関係の連続性と流動性をいかした教育課程

高校からの入学生について

相互の学びあい 働きかけあい 適度な緊張感

ソーシャルライフ 総合人間科 協同的探求学習の実施
(融合カリキュラム 中高交流学习)

教科指導のあり方と再編 生活指導のあり方の見直し

(2) 入試選抜方法

中学選抜 (男女各40名)

検査Ⅰ(小学校で学習した内容の総合力)

「学力試験」によらない選考

検査Ⅱ(作文などで思考力・表現力)

検査Ⅲ(グループ面接などで個性)

高校選抜 (男女比は考慮しない)

国語 数学 英語 作文 面接 調査書

平成12年度

検査 I

(検査時間：45分)

次ページからの物語（合計5枚）を読み進めながら、あなたも登場人物の一人になったつもりで、太字の問いかけに対してあなたの意見や考えを、別の紙（うす青色）に書いてください。

登場人物



健一君たちの徒歩遠足

健一君たちは、春の徒歩遠足で山の上にある城山公園に行く計画です。



城山公園：450年ほど昔、戦国時代に建てられた「白雲城」という城があった。今は壊れかけて石垣だけが残っていない。その城あとが公園になっている。



公園には郷土資料館があるんだ。そこに行けば「白雲城」に関する情報はもちろん、このあたりの歴史を知るための貴重な資料も展示されているぞ。

小学校6年生の春の遠足は毎年この場所で行われ、健一君はお姉さんの順子さんから「城あと」や「郷土資料館」のことをこれまで何度も聞かされてきたので、前から知りたいことがいっぱいありました。春の遠足を前にした健一君のクラスでは、遠足先についてグループごとに調べをすることになりました。健一君のいるグループでは、健一君がどういふことを調べたらよいのか参考になればと思い、お姉さんに聞いてみました。聞いたことは次のようなことです。

とちゅうに「白雲城」があったり、川があって自然を親しみながら歩くことができてよかったよ。

「白雲城」は1559年につくられて、「白雲城」がなくなるまでにこの城の城主は、4回も代わったのよ。



資料館には、貝や魚類の化石も展示されていた。そのほかに、江戸時代にこの地域にも「白雲城」があったことを示す資料もあったよ。

とちゅうの郡下村に「養神神社」というものがあるよ。また登っていくとちゅうに、「養神神社」につながる道路建設反対」の立て札がたくさんあったよ。

さて、あなただったら、お姉さんの話からどんなことに興味を感じ、もっとくわしく調べてみたいと思いますか。一番調べてみたいことと、その理由を書いてください。

(その1)

吉田研究室と共同で開発したソーシャルライフ
の実践が本になった





今回の計画と既実施の計画との関係がわかる資料

名古屋大学教育学部附属中・高等学校



第1期SSH

(平成18～22年度)

「サイエンス・リテラシー」を育成する教育課程を中・高・大の協同で研究開発する

第2期SSH

(平成23～27年度)

「サイエンス・リテラシー」育成のための教育・評価方法の開発

現状の分析
第2期までの課題

第3期SSH (平成28～32年度)

「イノベーション・サイエンス」を目指す人材育成
～中高大接続によるカリキュラム開発と実践～

育成する生徒：教科で学んだ知識を統合し、現代的な課題の本質について他者と協同しながら主体的に探究し続けることのできる生徒

第2期までのSSHで育成する4つの力

- A) 探究を通じてものごとの本質を深く理解する力
- B) ものごとを論理的、多面的かつ長期的に考える力
- C) 自らの考えを他者に表現できる力
- D) 問題を設定し、他者と協同して解決する力

イノベーション

協同的探究学習

学習方法の開発

- ・受動的な学びから主体的、協同的な学びへ

学習方法の実践

- ・理科や数学の授業に積極的に導入し、教育方法を普及

アンケートから見る成果

- ・生徒が効果を認識
- ・課題を多面的に捉える力の向上

- ・自主的な探究で留まり、実生活に結びつかない
- ・既存教科の学びを統合できていない

課題研究に取り入れる協同的探究学習 学校カリキュラム全体に導入

- 【目的】・学力の向上を図りながら、他者と協同して問題解決が出来る資質・能力を身につける。既存教科→SS課題研究→既存教科へ
- 【課題との関係】・既存教科と「わかる学力」が統合し、協同することで個人の理解が深まり、実生活に結びつけることができる

SSH中心教科

サイエンス・リテラシーやキャリア意識を形成

教育課程の開発

SLP I (中学2年/3年 必修)

興味関心の育成

SLP II (高校1年/2年 必修)

分野ごとの研究

ASP (高校 選択)

大学教員からの学び

アンケートから見る成果

- ・育成する力 A) 理解、C) 表現、D) 問題設定協同が伸張
- ・課題を多面的に捉える力が向上

成果

理系生徒の増加

- ・育成する力 B) 思考力に関する自己評価意識が低い
- ・研究グループが同じ考えを持った生徒構成になり、議論が十分に深まらない

SSH中心教科 → SS課題研究へ発展

SLP I → SS課題研究 I 【目的】探究する素地を育成

SLP II → SS課題研究 II

「科学倫理」 【目的】論理的思考力育成、情報科学倫理の育成、柔軟な思考の枠組みを創る

「数理探究」 【目的】仮説検証型の理科実験を統計処理により原因と結果の因果関係を明確にし、根拠を示して考察する

「STEAM」 【目的】文理融合4つの領域で「トップ・イノベーター」を育てる **大学での単位認定Advanced Placement**

ASP → SS課題研究 III 【目的】さらに深い探究を行う

【課題との関係】探究の基盤を作り、より深い柔軟な思考力を伸ばす

多面的評価

実践評価の開発

- ・意識を知る調査
- ・記述型思考力テスト

評価方法の実践

- ・思考過程を知る独自の記述型課題を作成、実施・評価

成果

- ・意識を測る調査と思考過程を測る調査のクロス評価に成功

- ・長期的探究の成果やより深い理解を測ることが必要
- ・思考力を意識調査で測ることの限界

多面的評価の開発と普及

- 【目的】・非定型課題と、長期的探究の成果を測る記述型課題の開発
- ・非SSH校や他のSSH校で実施し、SSHプログラムの有効性を測る

【課題との関係】

- ・過去の評価方法とデータに基づき、新たな測定方法の開発と普及
- ・卒業生追跡調査を行うことでSSHの成果を検証する

中高大接続研究センターとの協同体制構築

大学の入試制度改革WG

科学人材育成 ・ 生徒研究員制度 ・ 大学研究室訪問 ・ 米国の高校(BHSEC)との協同研究と課題研究の成果発表 ・ SGHとの相乗効果



「イノベーション・サイエンス」を目指す人材育成

～中高大接続によるカリキュラム開発と実践～

名古屋大学教育学部附属中・高等学校



育成する生徒

教科で学んだ知識を統合し、現代的な課題の本質について他者と協同しながら主体的に探究し続けることのできる生徒

育てたい力

- A) 多様な既有知識を関連づけて、学習した内容と実生活を結びつけて考える力
- B) 判断した根拠や因果関係について自分の考えで説明する力
- C) 自ら設定した課題について主体的に探究する力
- D) 課題の本質を理解し、柔軟な思考の枠組みを創造する力

産学連携

- ・名古屋大学をはじめ、地域の大学と連携し課題研究をサポート
- ・COI (Center of Innovation) のトヨタ系企業群やNCESと連携し、SSHを推進

生徒研究員制度

生徒が自発的に行うサイエンスプログラム現在は6プロジェクト(色素・数学・ヒドラ・宇宙論/相対論・粘菌・チャンドラ)

・課題の本質理解・課題発見・課題解決を協同で行うアクティブラーニング
教科をつなぐ協同的探究学習

第3期SSH 名大附属版人材育成カリキュラム



名古屋大学と協同研究開発

- ・高大接続入試・IB資格活用法の開発・単位認定制度
- Advanced Placement (AP) curriculumの開発

SS課題研究Ⅲ

本校内に設置されている名古屋大学教育学部高大接続研究センターを拠点に、大学教員の指導により発展的な課題研究を継続して実践する

高校 SS課題研究Ⅱ [PBLに基づくパフォーマンス評価 ポートフォリオ評価]

「STEAM」高2必修

教科での学びを統合して、理系・文系にとらわれない柔軟な発想に基づき、イノベーションの基盤をつくる課題研究
「STEAM」=Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics

「科学倫理」高1必修

柔軟な思考力・論理的思考力・メディアリテラシーを育成するTTによる、課題研究の基盤となる新たな合科科目

「数理探究」高1必修

理科的な材料を使って数学によるデータ分析・考察・説明を行う
理科・数学教員がTTで行う新たな科目

中学 SS課題研究Ⅰ (2・3年必修)

観察・実験・体験を通して幅広い興味・関心を育成する

SS課題研究を効果的に進める特色あるプログラムクラスター

生徒の思考過程・意識を測る多面的評価

・深い理解を測る非定型的課題と、長期的探究の成果を測る記述型課題の開発

多様な

英語プログラム

- ・課題研究の発表やサイエンスプロジェクトを米国(NY)の高校と協同で実施する(BHSECプログラム)
- ・英語での思考力や表現力を育成するALEプログラム
- ・トップ型SGUのG30と連携した授業

ICT

- ・アクティブラーニングをサポートする、蔵書4万冊を誇る図書館・情報の提供を保障・学内LANで大学図書館と繋がる
- ・校内無線LANを活用した電子黒板、タブレット型端末や大型TV会議システム

SGH

- ・SSHと同様、全校生徒が対象
- ・人文社会科学の側面からSSHを強化
- ・文理が融合した新しいアイデアの創出
- SSHとSGHは車の両輪

第1期SSH(平成18年～平成22年)

「サイエンス・リテラシー」を中学・高校・大学の協同で育成する教育課程の研究開発

成果

- ・SSH教科、総合人間科の教育課程開発
- ・協同的探究学習法を大学と協同開発

第2期SSH(平成23年～平成27年)

「サイエンス・リテラシー」育成のための教育方法・評価方法を大学と協同で開発する

成果

- ・協同的探究学習により「わかる学力」を育成
- ・新たな教育方法と評価方法の考案



良

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

研究開発構想：トップ型SGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築



目標：ものごとの本質を捉え、国際的視野を持って探究し続ける、勇気と判断力のある「自立した学習者」を育てる

研究開発単位Ⅰ：国際的視野を持って探究する6年必修課題研究「総合人間科」

教育方法：Project Based Learning 評価方法：ポートフォリオ評価 パフォーマンス評価

「課題探究Ⅰ」

幅広い興味関心から
探究する心を育む

中1

【生き方を探る】
人と地域から

中2

【生命と環境】
身近な問題から

中3

【国際理解と平和】
体験から

中学

「課題探究Ⅱ」

○中学の学びを基に、
高校3年間で文理にと
らわれない1つの「地
球的課題」を対象に探
究する、仮説検証型課
題研究

○グローバルキャリア
モデルとのリレーシ
ン
ポジウム

高校

【心】
教育・犯罪

【文化】
言語・芸術
表現

【人権と共生】
生存・差別
・障がい

【生命】
健康・医学

【自然と環境】
地球・食糧・
エネルギー

【平和】
紛争・民族
・国際理解

地球的課題の6領域

研究開発単位Ⅲ：グローバル拠点を活用して、表現力や
判断力を身につける方法の開発

国内拠点 他的高校生と協同して英語で留学生と行う課題発見・課題解決型探究活動

○名古屋大学Global Discussion

海外拠点 現地の高校生と協同で行う探究型プロジェクトでの活用

○アジア拠点【モンゴル】新モンゴル高校、日本大使館、JICA事務所

○北米拠点【米国】Chapel Hill High School、ノースカロライナ州商務省

研究開発単位Ⅱ：国際的素養を身につける 協同的探究学習（既存教科）

教育方法：発問を受けての個別探究→集団による探究→再度の個別探究

SSHとの相乗効果

○大学教員による連続講座 学びの杜
SSH生命科学探究講座 SSH地球市民学探究講座
SSH物理学探究講座

○教科の枠を超えた融合カリキュラム

SSH自然と科学 SSH情報と社会

SSHとSGUは学習者にとって車の両輪

課題研究以外の研究開発

○Active Learning in English (ALE)
(Global Issueを留学生と英語で討論)

自立する学習者育成のための英語環境

○G30 for everyone (多様なステークホルダーとの討論)

○NUPACE(短期留学生と学びを共有)

○G30 International Program (長期留学生と学びの共有)



トップ型SGUと
一体化した研究開発

○高大接続研究センター
(H27年4月本校に開設)

協同で以下を研究開発

- ・高大接続入試
- ・Advanced Placement (AP) curriculum
- ・IB資格の活用

○名古屋大学海外事務所

○リーディング大学院
グローバルな学生と生
徒の学び合い

他大学との連携

- ・愛知大学
- GGJさくら21プロジェクト
- ・名古屋外国語大学



ご清聴ありがとうございました